

初級コースにおける Short Movie Project の可能性

北川幸子

(京都外国語大学)

筆者が二年勤務したアイオワ州にある大学での試みを報告する。この大学では1年生の日本語と2年生の日本語（共に1年間のコース）がレギュラーのコースとして毎年開講されているが、筆者の担当した1年生のコースでは、1年のまとめとして2年連続、年度末に日本語でショートムービーを制作するグループワークを行った。その際、それぞれのグループが教科書（『なかま1』）の文法項目のどれをセリフの中でカバーするのか、分担を決めることにした。例えばグループAは4, 6, 8課の担当と決めた場合は、台本の中でそれらの課の語彙や文法を必ず用いるようにさせた。学生が書いた台本は教師がチェックし、その都度修正させ、その過程を数回繰り返し、最終的なものができたグループから撮影を開始させた。制作する際にキーワードとしたのは、「見て楽しいもの」である。他の学生が見て楽しいもの、伝わるものを意識させた。

撮影したものを各グループが編集し、最後にゲストを招き、全体で上映会を行った。優秀作品賞を全員の投票で選び、賞品も用意して表彰式を行った。出来上がった作品は、次の年の1年生の最初の授業で上映し、1年勉強すればこのくらい話せるようになる、というロールモデルとして活用した。制作する学生たちにとっても、来年度の見本になるということで、強い動機づけになったように思う。

教室における語学学習は、ともすると飲み込みの早い学生や、努力型のまじめな学生が目立つ場になりがちであるが、このコースではどの学生にも一度は「いい恰好ができる」機会を与えたいと考え、多様な活動を行ってきた。このプロジェクトには創造性や芸術的センス、ITスキルなどが必要となり、普段は目立たない学生の活躍できる場となったのも良い点であったと思われる。また、その場で演技して見せる寸劇などとは違い、事前に撮影し、何度も撮り直しや編集などもできることから、緊張などの精神ストレスも少なかったように感じられた。

コースのまとめとしてのショートムービー制作の利点、効果などを整理し、今後の改善点を検討したい。